The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	章學誠の史學
Author(s)	内藤, 虎次郎
Citation	懐徳. 1930, 8, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88825
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

章學誠の史學

文學博士　內藤虎次郎

清朝の乾隆嘉慶の時代は考據の學が全盛を極めた時であつて、經學は勿論史學に於ても考據の大家たる錢大昕、王鳴盛などゝいふ人が出てゝ、史學の風潮を全く考據に傾けたのであつた。然るに其の時代に於て浙江の紹興府から一人の變つた學者が出た。さうして一代の風潮の間に獨立して、史學を考據の方法に據らずして、全く理論的の考へ方から研究したのである。其の人が即ち章學誠である。此の人は其の生立ちからして少し普通の學者とは變つて居つて、其の幼時は極めて遲鈍な人であつて、至つて記憶が惡く、十五六歲頃其の父が地方の知縣をして居つて、家庭教師を雇入れて學問をさしたが、僅か數百字の文句を暗誦することにも、非常に困難を感じて、其のくせ何か意見は有つて居つて、文章も下手であるけれども、自分一己の理窟を立てゝものを書いて、家庭教師などの言ふことは聞かない。殆ど持てあまされた程であつたが、二十一二歲位から其の學問が其の長所を發揮して來て、殊に一己の創見によつて著述することに興味を有つて來た。進士の試驗には首尾好く及第したが、其の學風も亦其の人と爲りも餘程變つて居つたので、官途の出仕も出來ず、一生を不遇に暮したが、併し其の間に著述した所の「文史通義」「校讐通義」といふ本は、まだ出版せられない當時からして、既に有識者に認められて、之を好む人は非常に崇拜して、其の一文出づる每に皆之を寫し傳へて有つて居る程であつた。それで歿後其の子によつて著述は出版せられ、幾度も版を重ねたが、最近數年前に至つて、其の全集を出版する人があつて、今では其の學問は非常に光を放つて、殊に新しい西洋の學問などを修めた人々の爲に尊重せられるやうになつた。自分は此の人の文史通義、校讐通義を讀んだ

のは明治三十五年が初めてで、其の時に大變面白かつたので本を二部杭州で買つて、一部を當時支那留學中の狩野博士に贈つた。其の後とも大學などでも頗る此の人の學問を鼓吹したが、其の著述も爲に我邦では割に多く人に讀まれるやうになつた。で十數年前に端なくも其の全集の未刊本を得て、之を通讀した所から、此の人の年譜を作つて發表したのが本になつて、支那の胡適といふ人が更に自分の作つた年譜を增訂して、世に公にしたので、支那の新しい學者の間に注意されるやうになつたが、其の前から支那の舊學を修める人でも張爾田、孫德謙などといふ人は、其の學風を慕つて特別に研鑽をして居つたが、最近になつては胡適の外にも精華學堂を出た姚名達並に四川の學者で劉咸炘といふ人などが、最も章氏の學を發揮して、各著述を公にして居る。今日では此の人の學問を特別に鼓吹する必要もない程になつたけれども、以前は其の學問が一種の勝れた特色があることは一般に認められない。或は多少認められても其の眞意を了解する者が少かつたので、自分も之を鼓吹したのであつた。

今日でも乾隆嘉慶年代に於て、斯くの如き卓拔な一種の學問をしたといふことは、依然として其の價値は失はれないのであつて、其の學問の淵源は勿論古く漢代の劉向、劉歆、唐代の劉知幾、宋代鄭樵などから出で居るとは言へ、章學誠獨自の極めて透徹した前人未發の考へもあつて、殊に史學を標榜しては居るが、あらゆる學問を方法論の原理から考へるといふことは、類ひなき卓見といつて差支ないのである。で此の人の學問は理論の組織が頗る細密であつて、それで其の組立てた方法に從つて研究して往かなければ理解が仕難いから、之を短い時間で說明するといふことは頗る困難であるけれども、試に其の根本になる所の原則だけを說明して、其の學風の一端を紹介して見たいと思ふ。

一般の學者から見れば、此の人は史學家として見られて居るのであるが、本人の考へでは其の著述の表題

にもある如く文史に關する原則の研究ばかつて、文史といへば大體に於て著述の全體に亘るのである。唐書の藝文志には文史類を廣義の文學評論の意義に用ひて居る。文史通義といふ意味は今の言葉で言へば、著述批評の原論ともいふべきものであるが、勿論此の著述即ち思想の表現の第一の對象となるものは、道である道といふものを此の人は說明して、「道なる者萬事萬物の然る所以にして。而して萬事萬物の當に然るべきにあらざるなり。人の得て見るべきものは。則ち其の當に然るべきのみ」と言つて居る。此の人は其の道の發生して來る順序を考へて、道は天に生じ、天地が人を生ずれば、茲に道あるのであるけれども、それだけでは未だ形に現れない。道の形に現れるのは三人居室から始まる。三人室に居れば其處に分任、今日の言葉で言へば分業といふものが生ずる。或は各別に事を司る。或は更代の仕事をするといふことになるが、さうなつて來ると均平、秩序といふことが出來る。平等と秩序とが紊れることがあるので、年長者をして其の平を持せしめる、即ち裁判をするといふことになる。それからして長幼尊卑の別も出來、それから什伍、千、百といふやうに數が殖えて、さうして各組が分れるといふことになつて來ると、各其の上に才のすぐれた組の頭が出來、さうして更に德の盛んな者を推して之を統治するといふことになつて、其處に君となり師となる者が出來て來る。

斯くの如くして道は段々發展して來たのであるが、支那の歷史としては法が積み美が備はり、唐虞の時代に至つて善を盡した。殷は夏に因り周は殷に鑑み、周公に至つて大成した。周公が大成したといふのは、周公は固より聖人であるけれども、併し其の大成するのは周公の智力によつて能くしたのではない。其の時會が然らしめたのである。古來の聖人で集めて大成したといふのは、勿論周公獨りであるが、これは時會が周公をしてさうさせたので、周公自らも、自分が集めて大成する時會に當つたといふことを知らずに、自ら大

成したのである。然るに支那では孟子の如き人は集めて大成したのは孔子だと言つて居るが、今自分は周公を集めて大成した人だと言へば、孟子の說と違ふやうに考へられるであらうけれども、それは必ずしもさうではない。勿論孔子も集めて大成した人であるが、周公の集めて大成したのは道であつて、孔子の集めて大成したのは、周公の道を敎へとした所に存するのである。

是等の由來を眞に理解しやうと思へば、道と器との區別を知らなければならぬ。易には「形より上なるもの之を道といひ、形より下なるもの之を器といふ」といつて居るが、道といふものは器を離れて存するものでない。さうして孔子の敎を載せて居る所の「六經」といふものは、勿論道を載せて居る所の書であるが、併し其の實六經に載せて居る所のものは皆器である。六經といふものは古來の聖人の前言往行であるが、其の前言往行といふものは、皆器によつて現れて居るので、それを記載したのが六經であるから、六經が道を現すには、器によつて之を現して居るのである。然るに其の古代に於ては其の器によつて敎を立てゝ、即ち治敎——政治と敎とが二つに分れず官と師が合一であつて、即ち政治と敎育とが一致をして居つたから、敎へ——學問は政治の實際の器によつて現れて、學ぶ者が其の器によつて直ちに道に接することが出來たので器の外に之が道であるといふものを示されなくても、自然の器によつて道を會得したのである。然るに周の世が衰へた頃からして、治敎が二つに分れ官師が二つに分れることになつたので、其の器を著述の上に現してさうして敎へとしたのが即ち孔子であつて、茲に至つて其の文字を以て著述とすることになつた。で孔子は或る時は「予れ言ふ無からんと欲す」と言つた。それは此の世の中にありとあらゆる器によつて自然に道が現れて居るのであるが、之を六經に載せるに就ては、言ふ所ならざる能はざるのである。然るに又一面で、孟子の如きは「吾れ豈辯を好まんや」と言つて居るそれは道と器とが離れて、道は器によつて現はれずに、

人によつてなづけられるやうになつて來るといふと、我れの道彼の道といふやうに色々分れて來るので、自然に其處に論辯を要することになつて來るから、己むを得ず論辯するといふのである。

併しながら孔子の道は單に空言に託せずして、之を行事に現すといふことを主としたので、其の行事といふのが即ち古來の前言往行をいふのであるから、それを現す所のものは即ち史であるから、此の人の考へでは、凡そ學問といふものは即ち史學である、史學でないものは學問でないと、斯う考へたのである。

章學誠は又學問といふことに就て、易に「成象之を乾といひ。效法之之を坤といふ」學問とは模倣の謂ひなり、道なるものは成象の謂ひなりと考へて、又孔子の「下學而上達す」といふ語があるに就て、即ち形而下の器によつて學んで、形而上の道に達するのが學問の目的であり、方法であると考へたのである。

どういふ風にして成象たるを知つて之に模倣するかと言へば、前言往行の色々の變化を究め、久しき年代に亘る所のものを多く知つて、さうして其の間に所謂成象といふものを自得して、それに模倣するのが即ち教育の道である。と考へて、道の軌範に從つて教育するのであるが、此の意味から言へば總ての學問が即ち史學でなくてはならんといふことになつて來るのである。只茲に後世になつて道なり教なりが、色々多岐に分れて來るといふのは、即ち儒者などの如く、其の古來からの存してゐる器によつて學んで居りながら、器よりして道を認める所まで思ひを致さないで、只故なき前言往行を記憶して居るだけで、發明する所がない愚昧な一派の者がある。これは即ち孔子の言ふ學んで思はざるものである、一方には又古來の前言往行に因らず、道を載せた六經に因らずして、只何んでも自分の心で考へて、自ら是とするやうになる一派の者もある。これは即ち聖人の言ふ思ふて學ばざるものであつて、それが即ち諸子百家の雜說の因つて來る所である。

以上は章學誠の道と學との因つて來る根本を說明した所であるが、斯ういふ原理の上に立つて、さうして

總ての古來の著述を判斷して行つたのである。それは色々な論文によつて現れて居るが、其の一つの有名なのは「言公」の論である。章學誠が言ふには、「古人の言は公の爲にして私に據つて己れが有と爲さず」と言つ居つて、古人が言を立てる即ち著述とするといふやうなことは公の爲にするものであつて、一個の私有物とする爲に、之が自分のものだといふ爲に立てるものではない。元來は道を明かにするが爲に、言で以て其の目的を明かにし、それから言を十分にする爲に文といふものを用ひる。其の文によつて目的が達せられゝば必ずしもそれが自分の說であると言つて、私有しなくてはならぬといふことはない。で一番初めは著述のない時代、即ち道を現す器といふものは、政治其の他の世の中にありとあらゆる機關によつてのみ現れて居つたのであるが、其の中にそれを著述によつて現すことになつても、最初の著述は其の器を載せ道を明かにする爲の著述であるから、自分の一個の言を立てる爲の著述ではないのである。で一人の立言者があつた時に其の道を傳へた後の人は、其の立言者の著述の後に直く又附加へて書いても、前の立言を推弘める爲であれば少しも差支ない。後の立言者は前の立言者と一體になつて、さうして之を又後世に傳へて差支ないのである。然るに後世の學者はそれ等の古代の著述を見た時に、之が最初の立言者の眞の著述であつて、其の附加へたものは皆後人の僞作だといふ風に判斷をするが、其の判斷は當つて居らぬ。つまり前の立言者に對して後の繼續者が擴充して書いたまでゞあるから、眞僞の議論を其の間に加ふべきものではない。其の立言者と其の繼續者との關係によつて、其の議論の發展を見るべきものである。

之が大體に於て言公の論の主旨であるが、章學誠は六經其の他の著述に就て、一々事實を指摘してさうして古代の著述の批判を示して居る。これは古代の著述を批判する方法として一つの新しい見方を出したものであつて、經學史學の研究法に於て極めて重要な考へ方である。

第二には章學誠は、六經皆史なりといふ標語を出して、之が支那の學者一般に非常な衝動を與へたものであるが、六經皆史といふことに就ては、時としては經學者などの誤解を招いて、其の反感を買つたことが少くない。經學者は經といふものは總ての著述の上に一段高く立つて居るもので、之を史といふ風に見るのは、何か經を汚したことのやうに考へられて、聖人の立言である經と後世の學者文人の書いた史と同じ位に置いたやうに誤解することがある。章學誠の六經皆史といふことはさういふ意味でないのであつて、六經は皆古來の前言往行を記錄した所のもので、即ち其の聖人の道を載せる所の器を現したものであるといふ意味である。例へば章學誠は「易教」といふ篇を書いて居るが、それには「易は即ち周禮の器である、易の尊い所以は、それが古代の聖人が之を一種の禮制の道具なりとして用ひた所の、其の遺法を傳へた書であるからである、易の如く古の聖人が實際使つた器を記載した本は、さういふ來歷即ち歷史を有つて居るから尊いのであつて、後の人が易の眞似をして作つた例へば楊雄の「太玄」とか、司馬光の「潛虛」とかいふやうな本は、一人の智慧で實際古代に行はれた實跡も何もないのに、妄りに製作したものであつて、それな來歷といふものを有たないから少しも尊ぶに足らず、之が妄作と言つてよいのである。」それから章學誠は又「書教」といふ篇を書いて、記錄の法を論じて居る。其の言葉に「三代以上。記註有二成法一。而撰述無二定名一。三代以下。撰述有二定名一。而記註無二成法一。」と言つて居る。これは記錄の方法に關する議論であつて、殊に歷史を著述として見る上に於て、大變重要な觀察をして居るのである。元來記註といふものは前言往行を忘れない爲にするものであるが、其の記註には必ず事實あつたことを其のまゝに書く法則を立てゝ、さうして遺漏なく之を傳へなければならぬ。それは即ち材料として記錄されて貽されて居るのであつて、それが著述となつて現れる場合は撰述無二定名一であつて、其の記錄の中から自分が好む所の題目によつて、各然るべき著述をしてよ

いのである。其の目的に從つて、例へば尙書の詔誥、洛誥の如く、周の時代の都を奠めたことを書かうと思へば、其の記錄の中から都を奠める上に就ての必要なる事實を拾ひ出して、さうして最も適當な方法で其のことを著述すればよろしい。或は又康誥などの如く天子が自分の親屬を諸侯に封じたりすることを、敎訓として後に貽さうと思へば、それに關する始末を記錄の中から拔出して、さうして一つの著述とする。著述は如何樣な體裁でもよろしいのであるが、其の根本たる記錄は一定した正しい根據から成立たなければならぬ之が昔の方法であつて、後世になるといふと歷史といふものが、例へば「史記」といふやうな歷史の體裁が出來るといふと、其の後の歷史は悉く其の同じ體裁によつて書く。然るに其の體裁の根據になる所の記錄といふものは、十分に確實な記錄が備はつて居らぬ。それで確實な記錄のない所から、著述の體裁だけの一定したものを作らうとするから、其の著述といふものが、非常な不確かな信用の出來ぬものになる。之が即ち三代以下、撰述有二定名而一記註無二成法一といふことになるのである。記註に成法がないから材料を取るのは因難で、さうして動もすれば事實を紊る。然るに記註に定名があつて、體裁は一定して居るから本を作ることは割に容易く出來る。そこで文が質に勝つて、愈以て不確かな記述が出て來るのである。三代以下の著述でも其の良い勝れた著述といはれたものは、皆必ずしもきまつた體裁はないのである。例へば「通典」が作られた時に、通典は一體禮の變遷を書いたものであるが、其の間に禮に關する議論を差挾んでも差支ない。又司馬遷の史記は自分が書いた本文の後に、其の材料になつた所の原文を存錄して居ることもある。さういふことは少しも差支ないのである。

所で著述がだん〳〵變つて行く所の道行きとしては、初めの「尙書」は最も理想的な著述である。即ち成法のある記註を本として、さうして自分の心要な題目によつて勝手に著述をした所のものである。然るに後

になつて此の尙書の體裁が一變して左氏の「春秋」となつた。尙書にはきまつた體裁がないけれども、左傳にはきまつた例、即ち編年體が出來て來た。左傳が一變して司馬遷の史記即ち記傳體の歷史體になつた。左傳は年月によつて事實を並べて行つたが、司馬遷は之を變じて類例によつて歷史を作つた。司馬遷の史記が一變して班固の漢書になつた。史記は古代から近代迄一つの歷史として、通じて其の變遷を現して書いてあるのに、班固は漢一代のことを斷代の歷史として書いた。併し兎も角も此の時迄は古來からの法が段々變化はして來たが、それで形は違つて居るけれども、精神は一樣である。殊に司馬遷の史記の如きは、本紀、書、表、世家、列傳と體を分けて書いてあるが、併しそれは單に外形上さういふ區別をしたのであつて、內容に於ては其のやり方は自在で、其の名前に拘束されて居らぬ。例へて言へば、司馬遷の「伯夷列傳」は伯夷の爲に傳を書くばかりでなしに、總ての列傳の總序として一番初めに書いたのであつて、題目は何んであつても、其の內容は自由自在に如何なることを書いても差支ないやうにしたのである。其の後班固以來記傳體の斷代の歷史が續いたが、宋の司馬光に至つて、又左傳と同じやうな編年體の「通鑑」を作つた。然るに其の後になつて南宋の袁樞といふ人が「通鑑記事本末」といふものを作つた。歷史の體は古來斯くの如く變化をして來て居るが、此の記事本末の體の歷史が最後に出來たといふのは、これ即ち一番最初の尙書の體裁に復つて來たのであつて、袁樞其の人は勿論さういふ大したえらい見識を以て書いたのでなしに、單に通鑑の記事の一つ一つ事件を纏めて記憶する爲に、便宜上書いたに過ぎないのであるけれども、歷史の發達の順序としては、斯ういふつまらない人の著述でも、自然に古代の最上の著述の趣意に合するやうになり來つたのである。

斯ういふ見方はつまり言はゞ、最近の歷史の體裁と自然に合して居るのであつて、今日西洋の有名な著述

でも、總て此の記事本末の體で書くことになつて居るのであるが、其の歴史がさうなるべきものだといふことは、章學誠は百五十年前に於て既に考へて居つたのである。

章學誠は又詩教の篇を書いて、あらゆる著述は支那では戰國の時代から初めて盛んになつて來た。章學誠の意見では、戰國の文は源は「六藝」に出て居るけれども、又最も多く詩の教から出て居る。後世の文は其の體は皆戰國に備はつて居り、著述といふものは初めて戰國になつて專門の仕事になつた。詩の教といふのは必ずしも韻を蹈んで居るばかりでなしに、其の詩の精神といふものが、事を論じ、ものを形容するのに自由自在であつて、如何なる方法にでも思想を表現することが出來るから、それであらゆる著述といふものは詩經から出發するのである。斯ういふので「易教」「詩教」「書教」此の三つによつて、古來の著述の源流を論じたのであるが、其の外に此の人は「禮教」といふ篇を書いたけれども、之は最初出版された文史通義には載つて居らぬ。それは易教、詩教、書教、に比しては、十分な力を有つた論文ではなかつた。で或る友人は、此の人に「春秋教」といふものを書くことを勸めたが、それは書かなかつた。章學誠の書教の論の中には春秋の中のことも含んで居るので、書教を書けば春秋教といふものを書く必要がなかつたのである。つまり支那の在來の經書の分け方の中に古來の著述を總括して、さうしてあらゆる應用の方法を論じたのである。其の外にも小さい論文の中に此の人の時々卓見を現して居るのがあつて、例へば「史德」といふ篇には、歴史を書く者の資格、即ち才、學、識の三長を有すべしといふことは、昔から言はれて居るが、其のことやら、殊に著述者の眞實即ち正しく著述をするといふことに就て論じてある。即ち此の著述は詩の教の思ひ邪なしといふことを以て、精神とすべきであるといふことを論じてある。それから又歴史の材料の取扱ひに就ては、「史釋」「史註」などといふ論文の中に論じてある。それから又歴史には一代の史あり、一國の史あり、

一家の史あり、一人の史ありとして、各それに關する用意を論じて居る。其の外に著しいのは「申鄭」といふ篇があつて、申鄭とは宋の時代の鄭樵のことをほめたのであるが、元來支那で三通といはれて居る「通典」「通志」「文獻通攷」と此の三つの中で、通典の勝れた著述であることは、何人も異論はないが、通志と文獻通攷とに就ては、同じく宋末の著述であつて、其の書き方の相異のある所から、屢比較論が出來て居る、一般には馬端臨の文獻通攷が大變に整頓された良い著述であつて、通志は劣ると言はれて居るのであるが、章學誠はそれに反して、通志の方が其の出來榮わが惡くても、史論が勝れて居つて、精神は立派なものであるといふことを主張して、馬端臨の文獻通攷の方が劣るといふことを論じたので、之が最も乾隆時代の一般の學風とは反對の位置に立つて居るのである。

それで章學誠は歴史を研究するのに整輯排比といふやり方があつて、それは史纂である參互搜討といふことをするのは、史考である。これは兩方共史學といはれない。勿論其の整輯排比、參互搜討、共に役に立たんといふことではない。良い著述をする爲には、材料を並べたつまらない著述の中から、必要なことを取出すのであるから、其のつまらない著述も役には立つのであるが、史學といふものは、其の材料を集め、材料を撰擇するだけでは史學にならないので、それを如何に取扱ふかといふことが史學である。それで章學誠は獨斷の學といふことを大變尊んだ。此處で言ふ獨斷といふのは、材料を考へずに空言空論で獨斷でするといふ意味ではなくして、其のある所の材料を如何に處理するかといふ考へに就ては、一個の自分の頭腦によつてやるべきものであるといふことを獨斷と稱したのである。獨斷の學問の尊いことを頻りに主張して居る。章學誠は支那の古來の正史の中で、古い史記、漢書其の他の歴史は皆家學であつて、親から子に傳はつて、澤山の材料を如何に處理すべきかゞ十分に考へられ拔いた上で、出來上つた著述であるからそれで尊いので

あるが、唐時代からして一度に澤山の學者を寄せて、それに色々仕事を分擔させ、又それを總括する人があつて、さうして纂輯する方法で歴史を作るといふことになつてから、著述の一貫した精神がなくなつて、其の史學といふものは衰へたといふ考へ方をして居るのである。

此の人の學問には此の外にも色々な題目に亘つた考へがあるが、殊に其の中で史學の分派として最も大切なのは方志の學といふものである。即ち地方志の學問である。地方志の學問には章學誠は古來にない一家の組織立つた考へを有つて居つて、之に就ては當時の有名な經學者戴震などゝ全く反對の位置に立つて、論難をした。地方志を書くに記傳體に史を書くこと、掌故といふもの即ち律令典例などの如きものを書くこと、それから文藝に關することを書くこと、此の三つの體裁を備へて、さうして一般史の材料になるべく著述をして置くといふことの必要を主張した。當時の地方志を書く多くの人は、單に地方志を沿革地理を主として書くのとは違つて、過去のこと現在のことの資料として書く意見であつたので、これは沿革地理を書くといふ主義とは別個の考へであるが、隨分面白い考へである。

其の外此の人の最も勝れた研究は校讐學であります。校讐學は「校讐通義」に重に論じてあるが、之が即ち著述の源流と考へる學問であつて、一面から見ると書籍の目錄の學問であるけれども、其の目錄の學問といふのは、單に書籍の目錄を並べて分類するといふのではなくして、書籍の著述の意義から考へて、書籍の世の中に出て來るのを發生的に考へて、さうして分類法を考へたのである。必ずしも古代の分類が良くて、近代の分が惡いといふやうに、昔のことばかりを尊ぶ意味から論じたのではない。勿論古代の分類が勝れて居つたこと、即ち劉向・劉歆などの分類が勝れて居つたことを論じて居りますけれども、それは即ち劉向、劉歆が學問の流別といふことを知つて、著述の發生する時代を諦めて居つたからとして、劉向、劉歆時代に

書籍を六部に分けたのが、後世になつて四部に分けられるやうになつたのは自然の勢で、これは己むを得ないといふことを十分に認めつゝ、分類が如何にすべきものかといふことが、根本から研究して居るのである。これ等も今日の目錄學に取つても非常に有益なものである。

大體章學誠の學問は以上述べたやうに、今日から考へれば、史學を單に事實を記錄する學問とせずに、其の根本として原理原則から考へやうとしたのである。其の考へ方は哲學的であるが、併し此の人の考へとしては、あらゆる學問は哲學が根本ではなしに、史學が根本である。あらゆる學問は史學其のものである、史學の背景のないものは學問にならぬといふ意味で、總ての著述を批判しやうとしたのが特別な點である。

これ等の考へは文史通義を通讀して、精細に其の組立ての仕方を考へると判るのであるが、粗雜に讀み去つたのでは、これだけの精密の組立ては判り難いのであるから、支那のこれを崇拜する學者達でも、なか〳〵此の人の眞意を得ることはむつかしいのであつて、漸く最近に至つて幾らか西洋の學問をした人達によつて其の眞價が認められるやうになり來つたのである。

で史學のみならず學問の見方から言つて、此の人の學風といふものは今に於て生命があるものと考へられるので、兎も角これを今日の學界に紹介して置きたいといふのが、自分の本志である。

易傳の道德思想

文學博士　武內義雄

私の演題は「易傳の道德思想」として置きましたが、併し私は特に易に對して深い研究をして居るもので